

13 偕楽園について

筆 者 榛村 恵夫

偕楽園と聞けば誰も水戸の偕楽園を思い起します。 多数の観光客が毎年訪れています。水戸の偕楽園に先立って、すでに掛川には偕楽園がありました。

水戸の楽園について

茨城県水戸市見川にあり、広さは3平方km 開園されたのは、1842(天保13)年で徳川斉昭(水戸藩第九代藩主)の時でした。

現在の年間来園者数は21万人余になり、国史跡名勝に指定されており、岡山市の後楽園や金沢市の兼六園と並んで日本の三名園の一つに数えられています。

この園を造ったねらいは、藩士の余暇・休養の場として、また、領民とともに楽しむ場にしたいとしたことによります。それは中国の孟子の一節に「古之人奥民偕楽」（いにしえの人は民とともに楽しむという一節に基づいていると言われています。水戸の偕楽園に先立って、掛川に偕楽園がありました。

掛川の偕楽園について

開園は1805(文化2)の事で藩主は太田資順の時でした。このことは、「掛川誌稿」に南西郷村御茶屋嶺偕楽園とあり、西南郷久保沢にあったと記録されています。

開園の趣旨ですが、入園にあたっては尊卑貴賤を論ぜずとあり、水戸の偕楽園と同じです。掛川の偕楽園にも、お茶室がありました。この茶室は、今では日坂の川坂屋に残されていますが、この茶室の床柱は躑躅の巨木が使われ、水戸の偕楽園にある茶室の床柱と二分されたものと伝えられています。この躑躅の古木は薩摩藩の島津斉彬から寄贈されたものでした。

水戸の偕楽園は1945(昭和20)年空襲で、お茶室は焼失しましたが、1958(昭和33)年再建されました。

掛川の偕楽園は、その後天保の大飢饉により藩財政が逼迫し、とても維持できなくなり荒廃してしまいましたが、お茶室の方は何度か移築され、明治になってから、日坂の川坂屋という旅籠屋に移され、2003(平成15)年主屋の北側に復元されました。

松ヶ岡（旧山崎邸）で見つかった水戸偕楽園の拓本について

松ヶ岡が市に移管された後、お蔵を整理しましたら、大きな巻物が見つかりました。開けてみてびっくりしました。この巻物は水戸の偕楽園記碑の拓本で、園の創設者である徳川斉昭自身が漢文で書いたものが刻まれたもので、偕楽園創設の趣旨が書かれたものでした。

掛川藩では、大事に保管されてきたものを、明治になってから、松ヶ岡に移譲されたものと思われます。

太田氏と水戸家との繋がりについて

太田氏は譜代大名として、江戸城内では雁の間につめ奏者番 寺社奉行・若年寄・大阪城代・京都所司代・老中など幕閣の要職をつとめました。

太田氏と水戸家との繋がりとはどのようなものだったのでしょうか。水戸家の初代は徳川家康の十一男頼房で、その養母は、太田重正の妹で、家康の側室でもあったお梶の方でした。頼房の生母はお万の方です。

太田氏と水戸家とは、以前から繋がりがあり、昵懇の間柄で、学問好きな藩主が語りあう中で、偕楽園の話が出たのでしょうか。また、躑躅の床柱を分け合ったのだと思います。

掛川の借楽園は今ありませんが、また、園のあった場所も諸説あって確定していません。しかし、開園の趣旨は水戸の偕楽園に引き継がれています。

偕楽園が、身分の差にとらわれず、誰でも楽しめる園であり、掛川で最初に造られた事に意義があります。このことは、掛川市の住民に広く知ってもらいたいものです。

註1 掛川誌稿

掛川藩主の命を受けた斉田茂先 山本忠英が掛川藩領内を実地踏査して、資料を集め記録したもの。全15巻

2 太田資順(すけのぶ) 掛川城主太田氏になってから三代目。

太田氏の祖先には太田道灌がありますが、道灌と名乗る前は資長(すけなが) 持資(もちすけ)と名乗った。軍略もあり、文才にもすぐれていた。